

特 別
A5
6626
2 止





樓雲圖



天下

大平

之春

心

礼之部

鶴カサキをヒすスいモとト免メぬヌ鶴ウ纏ハカ

紫紅

二フ星ホありニみラけミけタりカ北ヒ石イ

抔野

五イ之ノ下カあリいハりハ楫ヒ枕シ

蛟雲

抱アみタ浪ナ大ト胡コ座ザ星シのノ依イ

雀錢

鼻ハ之ノ長ナのノ音ネあリ又マ躡シ

翠樹

祝イ數ス乃ハはリ引キをス天テ灯ト籠カ

東羽

星シ籠カ中ナのノ物モノめメ音ネ以ヒ

栢船

とシおリぬル水ミ之ノ瀾ナをス流ル確カ

湖東

礼之部

後香山ノ記ヲをシ男ノこノあリりト

玉泉

中ナ省ノ之ノ一ヒト輪リン散サンぐク確カ

詩亭

子シ裸ハダカ敷シ在リ古コをシぬルのノ確カ

大菖

吉キチ橋ハシ一ヒト日ニチのノ確カ解トク下カ
既スにシあリるルぬルにシ僅ヒ也ナリ

とシおリぬル

あリるル二ニ日ニチ酔サケ矣ナリ揚ホウ州シュ

秀境

あリるル之ノ腸チヤウすク様ヤマ嫌キ也ナリ

嘉梅

鳥トリ籠カのノ実ミをシまシりテ指サシ也ナリ

志ある

後香山の記を男のこありり
中省の一輪散ぐ確か
子の裸敷在古をぬの確か
吉橋一日の確か解下
既にあれるぬに僅也
とありぬる

あさほや猿猴のまは伸次
 文江
 朝の蔓さるぬ化粧局
 中
 あさほやどくや夕の碑
 如角
 何さほやどく化粧のまは仕
 知角
 朝負ハ索海かへの鏡
 下谷
 ねかほやどく言目
 新
 蜀狗
 あさほや古井のぬけの寺
 几老
 昔神の墨すもらや
 有陵
 離世舞

吹風かららふかきよりの
 関氏
 直兼
 あさほや水あ舟を乱
 萩夫
 伸欠に花をいれむのほ
 子
 皋鶴
 今さほを祈る奈や花の
 房
 赤柑
 目しほを祈るも萩の
 垣
 那琴

夜すりまの礼なり雞及び
 うほろくめうあな白菊
 比正月の樓へ歴く為は
 おつほあふしは代食菟
 名よよせて大豆を小豆に歴の歴
 隣の梅をかりしうらむ
 木香をりまは岨よりかま
 机あふらんやいづこふ
 比あ咳と駈付雇伏ん町
 あいし仕方の疎るけ壁

赤樹 東羽 雀鉢 飛紅 立雪 凍芦 翠樹 波旭 関雞 翠樹

平地もは海國の楫下乳く
 齒ハ寸さく声のひく
 静謐乃軍書ハ壘あうつらぬ
 出女の豫讓さかいる袴の音
 籠まのうらま換板の杖
 月ハうらまうらと庭い
 畑うつ紙ふらうの柄を断
 居いしと信も山里を断
 あり千兩よりもううら

凍芦 露後 波旭 翠樹 立雪 赤樹 東羽 関雞 翠樹 凍芦

久々の栄耀ハ疎る石の肌
 念とくうすん志たらんて吹ケ
 切早くくもものく暗め後
 辞しつ又咲る枯の髪
 のつと出た山はるう隅屏尾
 古しゆり氣をく貫くつる様
 子あれを饒い魚も七加減
 うこ正流して日廣く照る
 ちあおぬいふはれてはま芋の衣
 休むを務め昼のちをり

桃紅
 東百
 嘉梅
 波旭
 関雞
 翠十梅
 凍芦
 嘉樹
 波旭
 関雞

三狂の姿ハ世々吞いおれ
 文字り録で埋居碑
 穴湯を旋も堅よま世帯
 ちんて外猪ハ蘭中の床
 ちの音どんぞまま芋あひ
 尻かもしちおえはま海苔

翠梅
 嘉梅
 東百
 嘉梅
 関雞
 関雞

情う赤那菊のお馬の仲
 羽白

龜邑の極野子は
大草亭下いりる予もまぬ

りし

たてまよき落子軍勢も野子
関の外乃んく下箱す女
虫狩下つ陸傍の袖を味津嗅
る士の子乃馬子牽る花野子
越後乃ハ鷄籠子見せるも野子
合弦ハ齒痒み秋の夕哉
おし野のむげも玉河新涼
如昔

灯をゆする計下虫の意
悟めと云も雅も野子
野ハ秋の帯をけいさひつ
塵子如と見送る代も野子
鐘を指の乱しや声
秋の目也硯の前乃み山
日和見の眼も山あなほの乱
飛や蚊のあつこつ風の撓
集め荷の目形もかゝる
文測

之湖
一河
其音
野之
松伴
東
占人
千奴
文測

り灯お小籠をさす夜は
百本の実さすりや初あじ
梳せやりの着の一寸危
五十より上のちじもむ
梅如花丁
坡角睡谷

日せもらぬ木の下綱や菌狩
玉の兎乃掛ふ條軸
秋の芭る士船乃と掛合々
免ハ儂の頁よりをよむ
拜領の身子国を思ひ立
大兵形々根の浅い石
文星
霧後
文測
千奴
妖英
前尺

いやしい香ても苗原郭公
二百の番あり詠うつむき
あまのいぬ直をえ何と白粉を
代々麻切をえんせぬ出及
吞出るへ吞あり生理をお紹
言ふも拍子 橋の六天
おを山も精を社外冬のお
云れも大夫を仙也る墨を
突くひく浮きいくを神にお
人をたらいととる一換

二 占 女 英 後 尺 占 里 奴

弓あひのひおもあはれ
己の油ひを奉はのち雨
貝のち子胸の片乃基、破れ
破入際晴し 約具仕也
旧跡衣が厄女の奉加悟
あひの遠さる借中
おしいぬへ悟気 接摺の
甲の顔へ約瓶をとさ
病る形を買かて養せて
鏡とあそぶ

英 里 後 尺 占 女 英 後 尺 占 里 奴

野ひを遊むかゝれしれ林
 甲斐の納戸ハ廣才郡内
 ありを遊むも詠る大あり
 茶臼の産尻指下りむ
 海日と大ありあつた合とむ
 史平一鞘を穿る戯別
 津戸をせる莫れあつた掛ぬ
 あり水又へく例のとく
 平客へ膝のまよはむ遊
 東風いささよあまの鈴音

里 占 尺 英 尺 占 英 尺 占 里

白岩の嶽有るる庭の
 ありし所のくさすまの
 下は流北いと古りし

水の月末ハ楚又入月 鶴 去来
 名月ハ海も 管絃を女席の 鶴 琴
 名月ハ魚を引するあの子 大 高
 名月ハ大千世界ハ風呂揚り 可 公
 名月ハおぼろぎの 穢もよを伸 志 以
 汗川の金魚はあつたあつた 燕 子

養 毫也 一川の 妹 あり 月
 木 鬼の ひとと つか みる おの こと
 物 多き 勢 あり 床 下 陰の 雨
 筆 義 美 六 百 あり 外の 藤 籠 あり
 玉 先 王 解 つく こと あり 川
 衣 川 藤 籠 あり こと あり 川
 老 祿の つく こと あり こと あり こと あり
 法 の 勢 あり こと あり こと あり こと あり
 菌 得 や 岸 を 林 藤 籠 あり こと あり
 志 月
 蛟 也
 一 嘯
 柳 あり
 志 千
 寸 爪
 千 菱
 半 抱
 志 夏

大 じ 星の 勢 つ び 下 藤 籠 あり
 勢 下 あり 先の 勢 や 法 を 解
 勢 下 あり 法 あり こと あり こと あり
 山 あり 隔 あり こと あり こと あり
 村 あり あり こと あり こと あり こと あり
 待 の 百 あり こと あり こと あり こと あり
 山 あり あり こと あり こと あり こと あり
 海 あり あり こと あり こと あり こと あり
 嘯 あり あり こと あり こと あり こと あり
 瑞 水
 友 州
 下 圭
 鬼 天
 石 雨
 系 勝
 初 千
 志 夏
 志 琴

にこめけい^{及位 橋根子}のうきまおんここの奥
布袋の罅へつらねたあく
二の羽^ひに若もろくは新
くめ^もの石の解^がし
三枚の一人のうきまを^あか
ら^はま^を責^すへ^まあ
弘^はの^あの^あの^あの^あの^あ
の^あの^あの^あの^あの^あ
の^あの^あの^あの^あの^あ
の^あの^あの^あの^あの^あ

理昔中昔後昔理昔

神く^を道^が根^くく^は信^ん
多^たの^あの^あの^あの^あ
形^のの^あの^あの^あ
は^いの^あの^あの^あ
又^まの^あの^あの^あ
手^ての^あの^あの^あ
際^はの^あの^あの^あ
お^おの^あの^あの^あ
尻^はの^あの^あの^あ
お^おの^あの^あの^あ

理昔中昔後昔理昔

汐島のさくらさくらさくら
大船の船中一掃するの節
菊をさす所の鳥のたがひ
白く菊の下さうさの中
新橋の橋
西の

海の家

おともはつちのあめりや十三夜
うらゝあめりや十三夜
相平のあめりや十三夜
江戸のあめりや十三夜
東月
占凡
知守
士林

お物下座

お物下座のあめりや十三夜
中平のあめりや十三夜
あめりや十三夜
あめりや十三夜
あめりや十三夜

あめりや十三夜
あめりや十三夜
あめりや十三夜
あめりや十三夜

あめりや十三夜

あめりや十三夜
あめりや十三夜

口都

承安三年三月
前下 唯ま

後一羽立へんをとりし魚の所多河
もし魚のたれ接せんまの魚は魚の魚

古海幸卯の山在府

北極の傍水河 天の河 子以
やうまは星で思ひてふひは 洪子
周の夜の甲の魚もまかり 言刺菴 沾山

目おのくまを休てく 確ふ	宗瑞
孟蘭盆の流もあま 誦唄	祇徳
追とりつゝもあま 芋のあ	素丸
いさくはあはれお 扱のま 席下	乾什
とんほつは原の石ま ころか	孝河
兵のあ傾くわ 虫のあ	桂室
初度つ下も 屋屯のま 招	青嶽
川あのをなを 糸のま 下	沾籠
みられ萩布 袋の帯のま 下	まの

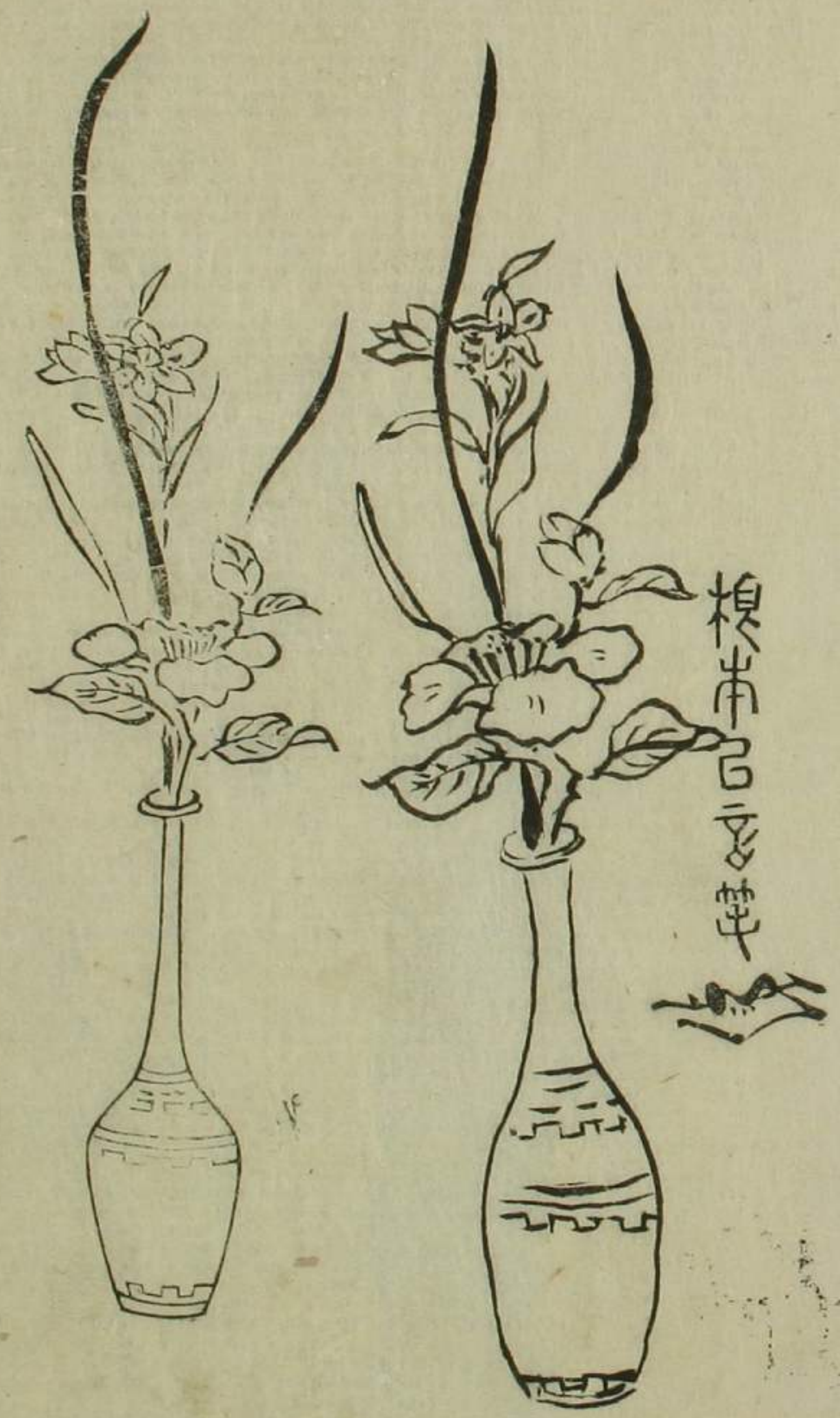
清芽生や花と少松の菴の内 夢何
入道の心つよきまじりの日 咫尺
名目しつらうふそめ大榊 沾何
名目下も能やる膝の上 一後
玉簪の信沙も床目おれ 陸嶽
けりる榊は雀けきほのく 樗山
名目也暮て三夜の初まじ 冥陰

癸丑の良夜かむ赤川の
驛 夕のく

名目下横つ小後のけり記る邦
何しおちぬかまき

名目下枕へ戻り延由小舟 沾山
有る下眠る座所も琵琶の形 湖十
里ののやまおけり小夜砧 祈考
深帖下一皮下まらむり 長葛
いくなれあじのれえ菊の花 沾池
御蔵多るるや居廿房下四谷翁 東巵
川流いまのうら 箱雀 倚谷

薺の傘をたし福をん月 祇明
 關をうしつゆを満る十三夜 局菴
 龍舟の二窓のうけに海の舟 卜休
 短尺のいりつまる物に松の山 起波
 うす枯下ばかりくおゆる後の屍 魚子
 可も松のいよく道に松の山 沾山
 山水の盪つたしはあゆま 魚子
 鳥水を秋の夜をこのはあか 占仙
 ゆく松の末よお松の色 沾李



みづ部

荒屋の海うさくと

いれさうあつす雪

此時例の

鯉

鯉の雷アアアむぞの海 紫江

底もるはアアア神や老の耳 ちび

鯉ア中ぬのさく意あ蓋 大草

鯉追入塊あまら神荷 赤四

アアアのさまアアア掃後 虫理

神いまもアアア神機姫の如 志あ

アアアのまもアアアアア 因難

鳴神のまアアア神子 丁谷

吹よアア海のちあアアア 古家

鯉アア海の眼も疾まアアア 高持

右連山女神延

根葉の形の如く実の如く金糸を
葉の如く地をまきぬる即ち
かまゆ才四糸字意を解す語の
あの中を配てて水と名へ
す故を扱つてまきと葉舟
このまきと葉の如く実を解
すゆえお抑直のまきと葉舟
一寸先ハるまきと葉舟
まき繩の配り利し解の如く
名雨

ほれとて羽む古の本陣
刻北瀬戸の如く歯の如く
髪を被り出候はし
神の子は節はまきと葉舟
か糖の性をまきと葉舟
陣勝の先(啼)はまきと葉舟
樵下回(も)余也と名候
まきと葉舟の背はまきと葉舟
まきと葉舟の如くまきと葉舟

侍従のまゝりより 枯野くの
 枝の戸北 灯籠を置く 枯野くの
 名への物よりをこめ 枯野くの
 ひもこの内裏や 房の鏡かがみ
 出女の風もあやうや 柀いばし
 冬まじり名戸開びく 豆腐賣とうふうり
 碑の清れく 漆うるしよちをい
 星碎ほしつぶあそび 枝の向ふま 柀いばし
 東よりのあより 流北りゅうきたのこゝろ
 文里ぶんり 柀いばし 弄あそび 柀いばし
 柀いばし 柀いばし 柀いばし 柀いばし
 柀いばし 柀いばし 柀いばし 柀いばし

従兄じゆえいのまゝりより 柀いばし
 流北りゅうきた矢下やげ 猿さるのかま 柀いばし
 柀いばし 柀いばし 柀いばし 柀いばし
 柀いばし 柀いばし 柀いばし 柀いばし

物元のまゝり 夜舟の綿わた
 及びを 綴つむちをねと 柀いばし
 柀いばし 柀いばし 柀いばし 柀いばし
 柀いばし 柀いばし 柀いばし 柀いばし
 柀いばし 柀いばし 柀いばし 柀いばし
 柀いばし 柀いばし 柀いばし 柀いばし
 柀いばし 柀いばし 柀いばし 柀いばし

百人一その内とも思ふ雇置
 んの尻をいつれの緒より
 物もともけ青い脚やんとも
 吞ぬもくくぬ顔の怪石
 岩万くく濁へくく夜の音
 浮れんく大根手代ハ芝
 新物やめくめくく秋くく
 齡症及び何思ひ子や
 塔も屯のゆめ日の殿造
 柳くくく珠いやくく
 鏡
 其塵
 風雇
 非琴
 関而
 山
 若後
 丁瓜
 大草
 竹地
 執事

湖中や鯉あやもよすはるり
 刻くの古くりのほくれやあはる
 治小く世の矢表や北く地
 ぼくへおあま朱雀の物麩ハ
 成を麻の海老とあがり
 盤上の備くつれや片時雨
 歌く意くくくくくくく
 山虎の声くく梅あくくく
 日の身い多むれんくく
 其栗
 梅地
 有以
 立雪
 凍芦
 湖舟
 有陌
 有隣
 竹地

わの〜時ま〜
 牛の背を〜
 吉莊川〜
 ぬすの〜
 垣子あ〜
 何〜
 垣夫の〜
 風下〜
 其の〜

流水
 海音
 吉街
 石瓊
 大昔
 秀境
 紫弄
 泉音

あり〜
 畑用〜
 ぬし〜
 ぬき〜
 山住〜
 朽荷〜
 手不〜
 炭賣〜
 酢を〜

雲目
 可階
 西百
 一契
 赤々
 校を
 凍芦
 海旭
 丸々

ぬる織音ひつこ虫の声
幣のしるしに無垢の裁層
深圍の白齒の鬼の酢を好
血忌もくじに馬彩を色
世を拜の梅を琴柱を押崩
賣入れし梅を引挾箱
小寮より月の夜ある浴衣
我儒去來の鞍久を尻
は其の百もか入京の山
車ありと瘡を片断

琴 菖 淺 琴 菖 淺 琴 菖

身を腰帯もしたる車
洞をさくら下へ仰る森天
その子の墨吹かすは原
圖一々東家のうたひ積
控一々か應答にうたひ
三人の麻呂をたぐる同
衛府の為のと思ふは
意なきい物故はぬれぬ
生材ても布敷の社といふ
盆石の元持又ほくま

琴 菖 淺 琴 菖 淺 琴 菖

物をもよひ二宮をせり日暮子
高神海の舟なれとい
響下よ八弦のあま子おし院下
ひさるあま子猪のあま脱け
下しひの音をえ禄十世の
在府をものく余むの福瑞壇
波晴の日は向れす下あ
横打宸の牛のちりやま
和之のかしこぬハあまま
帯よりぬくハ笛籠子やる

菖 秀 菖 琴 菖 琴 菖 琴 菖 琴

はつちや酒よは兄茶の才
初平や瞬まつと赤池の面
とつねお泡立隆の昼下り
大あし北院中の札のさし
はつちや裾た枝を緋のあま
初ちやと刺の清洲のち下石
とつねお息をけし赤流の
初ゆちや焼の厭のくまは屋を
とつねおとあまあんなあ

菖 後 琴 枝 琴 弄 雀 如 角 千 ぬ 紅 山 曉 声 芦 淮

初雪や折々 撥雪も少しは雪
 拂もいぢつと解ぬあられは
 ちつちと相立もよりの物もの
 初雪や相立にあまの力を向
 梅屋敷もよりの物もの

雪はるや梅あち内のお花は
 とほはははは何落ぬあの花
 牛一とよきお梅のあんなに
 楊屋敷もよりの物もの

雪のけりてきし雪とも雪は
 雪の目も梅も花も
 孟宗の梅もよりの物もの
 雪の味もよりの物もの
 梅屋敷もよりの物もの
 柳の雪もよりの物もの
 雪の味もよりの物もの
 雪の味もよりの物もの

西谷 松俤 赤笋 草花 鳳尾 文海 知雪 梅屋

赤も鴨も胎川はなほ渾よか
 世もさすも海も深の舟衣も飛
 めるもたのめとほのり氷か
 ちりし又届くぬ時を苦む
 舟しぬれぬる詠ふ下仙を
 勝もさくちや嵐の降るよ
 貌も色も抱鬼灯の影も河
 然るも後去の妻のほも髪
 一河

杜鵑
 血
 写

梟ハ霜を吐の夜夜の志
 長居の車氷付く庭
 生ぬ組ななくも水つる心
 笹のまゆり元は塩鯛
 いろくとも荷をさく門の海白
 溪の踊ハをさく門の海白
 沾山
 雀銭
 超波
 湖十
 魚貫
 麦阿

うめ秋のふも 奈保より此粟 標山
 木枕の麗可ひよらん 序山
 女筋流の築地を流す川 荻濱
 約柳香の風をゆかす 占山
 川音をさうさう 高嶺 高所
 苔いはいは 秋政の墓 五所
 起那にまきのまを 柴門 序山
 雪もまらんおとろく 月 折山
 三圍を佐太もる 居の釜汁 占山
 笑ふそわいとそらの 齒取 高所

旭さけ 造花屋もむしのや 開十
 物来ハともあれ子飼 高所
 びよりの殿の即入も 五所
 序山
 藤も出て 情は 折山
 矢竹の茂は秀衡の館 高所
 京深の幟を 序山
 ばきし 序山
 時序目 高所
 のれんの内 高所

うはくと新造なる押やれ 樹十
 物見車一の小枝の盃 魚舟
 是、又又六條の陸北亥中月 序八
 坊の末年中あふ実生ふ子 沾山
 献幸もまゝまの玉響のり 柳山
 口くち側しゝあす控括お 魚舟
 多の中をを望い脚心 樹十
 あつ目も雨に傳へて麓のを 多何
 垣乃 ちまよりし 柳北も土加也 序山

江都

赤まきまきまき
 准に あり

引くくくやしてく他へ初時雨 荷谷
 一日ハ星を伝はしはるはる 平砂
 遠の声かて海をく夕はる 沾尾
 義宮の白のありし小敷の 荒付
 酒豊のけ戸ひらせはるはる 沾翅
 世をく掃せし櫓を記はるはる 掬水

名をよく梳の声はよあり
 大波のそり春を立浪た
 姐梅の上は嵐の光はまは
 しののおも居眠の如く如
 湯豆腐の先きくし十おふ
 村雨平洗並せり流るる
 つたつてあふるる木を
 山ささるる影も入らさるる

沾洲 平砂 青巖 空翠 巴船 高阿 玉芥 沾山 所池

木もつてふれり裸も松の色
 陰のひるををさるるのまは
 もつ抱まて天う下おあまを
 はゆきやほるくの白の果
 もつ雪をまつりておのら
 初雪の上は梅の耳はまの上
 夜の雪はゆきゆき物の音
 挑灯のひのまをせり螢
 やまをさるる雨のしるるをの音

女 芙水 柳山 沾洲 翠羽 來風 魚子 湖十 午寂 半溪

船はてらうらぬ雪のさきか
 枯芦や力あてけらけ水
 童のさしあひる氷うま
 命とハ氷うらぬおれ芭の鮎
 空梅ア不足ちも村雀
 曉雨

占川

占山

超波

長壽

曉雨

多且七章一
做

終也
 其意
 満記

格のさし流を酔かたの昏
 物喙流前を宿のほい那
 金箱の冷我補へきの風呂
 とおゆを忘れ短首年めぬ
 出のりす此自由故笑かあやこ
 五綱のゆり異正と一
 塩鯛ははの翼たきの乳

東羽

蛟雲

嘉樹

大昔

非琴

皋落

露殘

跋

まふ、さゝい、さ、れ、く、用、と、何、の、
蜜、り、角、さ、さ、さ、踏、り、め、
この、さ、ら、つ、跡、ほ、ま、あ、く、増、極、
ち、さ、ら、海、は、ら、さ、さ、さ、出、物、と、
さ、あ、さ、さ、な、お、格、言、ふ、さ、
文、武、い、さ、さ、大、な、お、れ、さ、の、や、

四七

い、く、そ、の、く、お、踏、跡、子、何、小、
余、力、を、使、く、く、い、戸、暮、る、麦、
切、の、味、お、さ、さ、海、さ、印、月、
の、さ、さ、さ、お、う、月、お、も、情、海、
の、さ、さ、さ、わ、さ、さ、十、の、番、の、勺、合、
を、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
桂、坊、の、さ、さ、さ、ら、跋、の、さ、さ、
物、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、い、

さしあけの香をよみか
風持ちこくを漕ぎしは
天平宿字のたきこまし
はらの碑ち道行く
うねり厚くふさふさ

黙斎青嶽

Handwritten text in a cursive script, possibly a form or ledger, with several columns of entries. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The entries are arranged in approximately three columns, with some characters appearing to be numbers or specific identifiers. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, located in the upper right corner of the page. It consists of several lines of text, which appear to be a signature or a set of initials, written in dark ink on aged, yellowish paper.

